

『今月の天候と農作業』

通巻第5552号

2月号

平成25年 2月 1日発行

宮 崎 県

宮崎地方气象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	40	40	20

【概要】

平年に比べて晴れの日が少ないでしょう。

期間のはじめは、気温がかなり高くなる可能性があります。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、多い確率50%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

＜1週目の予報＞ 2月 2日(土)～ 2月 8日(金)

天気は、数日の周期で変わり、期間の前半は雨の降る日があるでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、高い確率80%です。

＜2週目の予報＞ 2月 9日(土)～ 2月 15日(金)

天気は、数日の周期で変わり、平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。

気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

＜3週目から4週目の予報＞ 2月 16日(土)～ 3月 1日(金)

冬型の気圧配置は弱いでしょう。天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稻

昨年は移植後の低温により、初期生育が停滞し、その後の茎数確保も遅れ収量にも影響しました。早期水稻の作柄安定には、こうした低温害をできるだけ軽減することが重要ですので、がっしりとした健苗をつくりましょう。

1 播種

十分に浸種し催芽した種子粃を播種します。

育苗箱に2^{センチ}の深さで床土を入れ、稚苗の場合は催芽粃で180^{グラム}程度均一に播種し、「苗立ち枯れ病」等の防除を兼ねて、定められた濃度で薬剤をかん水し粃が隠れる程度に覆土します。厚播きは徒長苗になりやすくなるので注意します。複数の品種を扱う場合は、混じらないよう注意します。

2 出芽

気温の低い時期なので温度確保が大切です。段積みの場合は、地面と箱の間に隙間をつくり空気が循環しやすくします。上段と下段で芽の伸長に差がでますので積重ねは十段程度までとします。

平置きの場合は温度が上がりにくいので加温機が必要です。温度は28～30℃を目標にし出芽長は5～10^{センチ}程度とします。32度を越えるとリゾープス菌（クモノスカビ）が発生しやすくなります。

3 緑化

広げた苗箱はかん水後、寒冷紗などで3日程遮光します。温度は昼間は25℃以下、夜間は15℃以上を保ち、この間は高温による苗の徒長や、急激な温度低下によるムレ苗及び苗立ち枯れに注意します。本葉1葉目が展開し2葉目が抽出し始めたら緑化を終えます。出芽から緑化までの温度や水管理は苗質に大きく影響し、この期間に苗の第一葉鞘高（腰高）を伸ばしすぎると軟弱苗になります。

4 硬化

硬化期間の前半は昼間は20℃以下、夜間は10℃以上を保つようにし、後半は徐々に外気にならしていきます。かん水は夕方行うと床土の温度を下げ湿度を高めてしまうので午前中に行います。

5 追肥

中苗や成苗は、播種後20日目と30日目頃に液肥を施用します。液肥は硫安の場合、1回一箱当り3^{グラム}を500^{ミリリットル}の水に溶かして散布します。これで窒素成分で一箱0.6^{グラム}になります。液肥を散布した後は、軽くかん水して葉焼けを防ぎます。

◆ 麦類

1 穂肥

今年は葉齢の進みや茎数確保など生育は順調で、早いところでは今月末には幼穂形成期を迎えます。小麦では、穂肥を2月中旬に10㎡当たり窒素成分で2・5kg、加里で2kg程度施用します。多すぎると倒伏しやすくなるため地力や生育を考慮します。

2 土入れ

土入れは、肥料の流亡防止、雑草抑制や防寒などの効果があるので、麦が節間伸長期に入る前までに行います。

3 排水対策

麦は、湿害に弱い作物です。特にばら播きなどでは、ほ場周囲や条間に沿って3m間隔で作溝を行い排水対策に努めましょう。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

中旬までは午前中の温度確保と、内張カーテンの開放による光線確保により光合成を促進します。下旬になると日射量も増え、最低気温も徐々に高まるため、加温機の稼働時間が短くなり、ハウス内湿度の上昇に伴う病害の発生が多くなりますので、夜温の高い日は内張カーテンの調節により、適度に加温機が稼働するようにします。また、収穫までの日数も短くなり、着果量も増えてきますので、追肥とかん水量を増やしていきますが、1回の量を増やさず、かん水間隔を短くするなど、極端に栽培環境を変えないよう、こまめな管理に心掛けましょう。

◆ きゅうり

ハウス内の温度管理は、午前中28～30℃、午後23～25℃、夜間12～14℃とします。

促成のつる下ろし栽培では、「芯止まり」になりやすいので、開花や収穫果の位置（生長点から3～4節目で開花、10節前後で収穫できるのが理想）に注意します。開花節位が上がった場合には、強めの摘果を行うとともにかん水量を増やして、草勢維持に努めます。

◆ ピーマン

受光態勢をよくするため、下位節の徒長枝を摘除するとともに、中位節以降の側枝も伸びたものは2～3節で摘心し、下位節まで光が当たるようにします。ハウス内の温度は、午前中28℃、午後は徐々に温度を下げ夕方25℃、夜間18℃とします。

◆ トマト

果実肥大と着色促進及び食味向上のためには、日射量の確保と葉数確保が必要となりますので、日中の内張カーテンの開放と15～18枚程度の葉を確保します。下旬以降は、着色までの日数も徐々に短くなり、着果数も増えてくるため、かん水量を増やして草勢維持に努めます。

◆ いちご

いちごは、曇天が続くと成熟に要する温度が確保できず、成熟期間が長くなり、裂果等の品質低下が懸念されます。ハウス内の温度は、午前中25～28℃、午後20～25℃、夜間5～8℃とします。

曇天が続き、日中温度が上がらない場合には、着色促進のため夜温をやや高めに管理しますが、8℃を上限とします。また、大玉果、食味向上のため10果前後に摘果します。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

◆ トンネル内の適正な温度管理

気温が低い時期なのでトンネル栽培では温度確保に努めますが、晴天日の日中は高温になる日があり、換気の必要な場合があります。レタスやスイートコーン、かんしょ、ニンジン等トンネル栽培については開閉管理を徹底し適温管理に努めましょう。

◆ スイートコーン

大型、小型トンネル栽培のは種適期となります。スイートコーンは発芽と生育の適温域が大きく異なる品目です。発芽適温は30～35℃で管理することになります。発芽後は22～30℃を目途に換気します。

◆ レタス

生育適温は15℃～20℃です。高温管理は葉がよじれたり変形球になりやす

く、寒害を受けやすくなりますので、日中は十分な換気を行ってください。

◆ 食用かんしょ

今月から来月にかけてが、トンネル栽培の挿苗時期となります。採苗前は外気温にもならしながら適温で管理し、苗の徒長を防ぎ、充実した苗に仕上げます。採苗は挿苗予定の数日前に行い、置き苗を用います。また、挿苗時には十分な地温が確保されている状態が理想ですので、トンネルは前日より密閉して地温確保（18℃以上）に努めます。地温が低かったり、徒長苗など条件が悪いほど活着が遅れ、いもの数も減りやすくなるので、適正な管理を行い初期生育を促します。

◆ さといも

早生種の定植期になります。連作障害が出やすいので連作は避けます。また、栽培ほ場はセンチュウ消毒を行います。健全な種芋（30～50g程度）を選別し、センチュウや乾腐病の消毒を行って定植します。

◆ 畦立てマルチについて

これから播種・植付けする品目の発芽・活着促進には、地温と土壤水分を確保することが大切です。マルチングする時はほ場の土を片手で握ってみて団子になる程度を目安とします。逆に手が濡れるようなら過剰ですので適湿になるのをまって耕起します。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ 完熟きんかん

完熟きんかんの出荷が最盛期を迎えます。これからは暖かくなり、過熟やウルミ果の発生が懸念されますので、ハウス内の温度管理に気を付けましょう。昼間は10～15℃を保ち、夜間は凍害に遭わないように注意しましょう。

収穫は、果実の着色程度や熟度に合わせた収穫を行いましょう。また、きんかんの果実は衝撃に弱いので、収穫・選果・選別は丁寧に行いましょう。

◆ マンゴー

赤い色の割合が多いほど、高品質の果実とされ、大玉ほど高単価で取引されます。このために重要となるのが、早期摘果と幼果期からの日照確保です。摘果の際は、極端な早期摘果を避け、果実の縦径が3割程度になったのを確

認してから行いましょう。その後は、果実を吊り上げて、光が十分に当たるようにしましょう。果実が5センチ程度になったら、結果枝2～3本当たり1果に結果数を調整しましょう。

また、開花直後のアザミウマ類の発生は果実品質を大きく低下させます。発生に注意し、ハチを出した後はすぐに防除を実施しましょう。毎年カイガラムシの発生が見られる園では発生に注意し、早めに防除を行いましょう。

2 果樹園共通

◆ 土壌改良

果樹栽培において高品質と高収量を得るためには、土壌の通気性と排水性の確保が重要です。たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壌改良を行いましょう。また、土壌の酸性化や塩基バランスの崩れは、養分の吸収や根の生育を阻害します。土壌診断を行い、石灰・苦土資材を適正に施用しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 電照ギク

2～3月出荷の作型は最も暖房コストがかかる作型です。それぞれの品種、系統に適した変温管理でコスト削減に努めてください。低温が続いていますので、低温開花性でない品種は夜温だけでなく昼温の確保にも努めてください。施設の多層被覆によりハウス内の湿度が高まる時間帯が長くなります。換気による除湿や定期的な予防散布などを行い、病害防除に努めてください。除湿機能を持つ被覆資材の導入も効果的です。

「神馬2号」、「神馬66-4」の3～4月出荷作型の再電照開始は総苞りん片形成後期から3～4日間実施します。開始時期の決定は、最寄りの農業改良普及センターやJAに相談し、「花芽分化の検鏡調査」を行った上で決定してください。

◆ スイートピー

今期は晴天が続いており、安定して出荷したほ場では特に草勢の低下が心配されます。タイミングを逃さず草勢に応じたかん水及び施肥管理を行ってください。液肥を施用する場合は濃度の高い液肥は根に障害を起こしますので、低い濃度で使用してください。「花シミ」も発生しやすい条件になってきますので、換気に努めるほか、循環扇等でハウス内の空気を動かして水滴の付着を防ぐなど「花シミ」の軽減を図ってください。また、定期的な生物農薬のダクト散布は灰色かび病対策に有効です。

◆ ホオズキ

7月出荷は2月上旬までの植え付け、8月出荷は中旬からの植え付けになります。土壌消毒を必ず実施し、ネコブセンチュウや白絹病などは場に持ち込まないよう、十分に注意して地下茎の選別・調整を行い、必要に応じて地下茎を消毒してください。萌芽時には、ほ場をこまめに巡回し、マルチに穴を開け、成長点の焼けを防いでください。

◆ デルフィニウム

沿海地域では2番花の収穫期から3番花の萌芽期になります。ボリュームを確保するため、適正な仕立て本数に整枝してください。中山間地域のロゼット打破作型では2番花の発蕾から花穂伸長期になります。極端な低温管理を行うと需要期の3月の出荷に間に合わなくなりますので、成長に応じた適正な温度管理を行ってください。

◆ トルコギキョウ

特に八重系のブラスチングや成長点の障害が心配されます。適正な温度管理に加え、不要枝、蕾の摘除、カルシウム剤等の葉面散布で発生の軽減を図ってください。灰色かび病による花シミや花粉へのカビ発生対策には生物農薬のダクト散布が有効です。

◆ ラナンキュラス

1月後半から収穫量が増加していますので、草勢が低下しないように150ppm程度の濃度の液肥を適宜施用してください。

(中村 広)

畜産

1 家畜

2月は「家畜防疫強化月間」です。冬場は鳥インフルエンザをはじめ、様々なウイルスや細菌が活発に動くようになります。家畜も寒冷ストレスを受け、疾病にかかりやすくなりますので、いつもにもまして衛生管理に努めましょう。感染症のほとんどは、人や物資、車両を介し伝播します。踏み込み消毒槽の設置は当然のことながら、施設や車両の消毒など徹底して下さい。「自分の家畜は自分で守りましょう!!」

高病原性鳥インフルエンザは、いつ国内に侵入してもおかしくない状況にあります。鶏舎や農場内の石灰消毒を実施し、以下のことにも十分注意して下さい

い。①長靴は鶏舎ごとに履き替える。②防鳥ネットは2センチ以下の網目にし、野鳥や野生動物の侵入を防ぐ。③鶏舎の壁や穴はコンパネなどで補修する。④殺鼠剤や粘着シートを使いネズミを駆除する。⑤家禽の飲み水は塩素剤等で消毒する。

口蹄疫については、依然として中国や台湾で発生が続発しています。日々の家畜の観察はまめに行い、異常が見られたらすぐ獣医師に相談しましょう。以下の項目について再度チェックをお願いします。①農場専用の衣服、長靴を使用する。②踏み込み消毒槽を常に設置し、汚れたら消毒液を交換しましょう。農場の出入りの際には必ず消毒をします。（家畜の集まる場所にいった場合は特に念入りに）③関係者以外は農場に入れない。④導入した家畜はしばらくの間は他の家畜から離し観察する。⑤日々の家畜の観察を十分行う。

2 飼料作物

冬場の牧草は、硝酸態を比較的多く含むものがあります。牧草を収穫する時、葉色が濃いものは要注意です。普及センターで事前に硝酸態をチェックし、安全を確認し、家畜に給与するようにしてください。

来月になりますと、トウモロコシ等の春夏飼料作物の作付けが始まる地域もあります。アメリカでの不作や円安の進展など、輸入飼料の価格は今後も上昇することが考えられます。購入飼料価格に左右されない経営を目指すためにも、自給飼料の増産に努めてください。

(須崎 哲也)

特用作物

◆ 茶

1 春肥の施用

春肥は、一番茶をはじめ、二・三番茶の収量品質の向上に大切な肥料です。時期は2月中旬～3月上旬を目安に施用します。肥料は地区の基準に準じ、うね間全面に幅広く散布します。施肥後は根を傷めない程度に軽く攪拌しましょう。

2 春整枝の実施

春整枝の時期は平均気温10℃が目安です。平坦地では2月下旬から、山間地では3月上～中旬頃に実施しますが、一番茶の摘採期の集中を避けるため、品種の早晩の他、地域の微気象等を考慮し、整枝時期を調整してください。その際は、整枝直後に急激な低温に当てないよう天気予報に注意して実施して

ください。

整枝の高さは、葉層を8割以上確保した上で、最終摘採位置から3～5割高い位置としますが、秋整枝を実施した茶園では、越冬芽にかからない高さで丁寧に整枝してください。

また、萌芽15日前からは防霜対策が必要ですので、それまでに、防霜ファンやスプリンクラーの整備・点検も実施しましょう。

3 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除時期は産卵開始時期の気温10℃となる2月下旬～3月上旬頃の春整枝後になります。

地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ葉液が十分にかかるように散布してください。

4 製茶機械などの点検・整備

異物混入防止や品質向上のため、茶工場内の清掃や製茶機械の事前点検・整備・調整を早めに行いましょう。

(佐藤 邦彦)

◆ しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌は、時期が遅れると害菌の付着が多くなりますので、暖地では遅くとも2月下旬までには終わらせましょう。

仮伏せは、植菌した種駒の乾燥を防ぎ初期活着を促進する作業で、菌糸の活着に必要な温度と湿度を保つ必要があります。排水や日当たりの良い場所に縦囲いする方法と、地際から40割以下の高さに横積みする方法とがあり、本県では横積法が多く使われています。それぞれほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で風が当たらないように被覆し、上面は雨が良く通り、かつ日陰ができるようにして保温・保湿を図りましょう。

2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、保温・保湿を図り、良質なシイタケの生産に努めましょう。

3 採取

発生したシイタケは、目標の品柄に応じて若干早めに採取するなど、品質の向上に努めます。特にほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないように丁寧に採取しましょう。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにポリ袋などで密封し、箱に入れて冷暗所で貯蔵しましょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は、仮植と苗床管理が主な作業となります。苗の良否が本畑以降の生育に大きく影響しますので、健苗育成に努めましょう。

1 苗床肥土は排水・通気性・水もちが良く、病害虫がない良質な肥土を使用しましょう。

仮植は葉数5枚苗（米粒大までの葉数）を使用し、活着までは床面が乾燥しない程度に灌水を行いましょ。

活着後は夕方に床面が少し乾く程度に灌水し、灌水過多による病害や根腐れが発生しないように注意しましょ。

ハウス内は日中、高温多湿にならない様20～25℃を目安に換気を行い、温度調整を行いましょ。

本畑移植7～10日前からは、苗の生育に応じて換気と灌水制限をして順化处理を行いましょ。

2 畦立は練畦防止のため、土壤水分に注意して行ないましょ。また、根張り促進のための地積確保と、排水対策も含めて30％以上の高畦にしましょ。

被覆は早作早進のため透明マルチを原則とし、黄斑えそ病対策等必要に応じてシルバーマルチ等を活用しましょ。

3 春消毒や苗床での農薬使用は、使用基準に沿って最善の注意をはらいながら行いましょ。

（松元 貴光）

内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

なになに農業アラカルト

冬期の消毒方法

2月は家畜防疫強化月間です。そこでより一層消毒を頑張りたいところですが、同じ消毒方法でも夏期に比べ冬期は効果が落ちると言われています。なぜなら消毒の効果は温度が大きく影響するからです。消毒薬の種類によっては水温が10℃下がると効果が2倍落ちると言われています。そのため、対策としては①消毒槽の設置場所を考慮する②消毒薬の濃度を濃くする等が挙げられます。

また、踏込消毒槽が凍結してしまうこともあります。対策としては①消毒槽に蓋（上蓋・中蓋どちらでも）を設置する②消毒薬を朝に作成し、その日に使い切る③自動消毒装置はパイプ凍結防止のために作業終了後は水抜きする④凍結防止剤を用いる等が挙げられます。凍結防止剤はウインドウウォッシャー液や不凍液のプロピレングリコールがあります。これらと水を1：1の割合で混ぜて、消毒薬を希釈します。するとマイナス20℃12時間でも完全には凍結せず、消毒効果も水だけで希釈した場合と同等の消毒効果が得られました。また、1%消石灰水・4%炭酸ナトリウム液・0.2%クエン酸液のpHにも影響しなかったと報告されています。

しかし、このように努力しても農場は外にありますので、消毒はどうしても気温の影響を受けてしまいます。そこで長靴の履き替えや更衣室の設置、飼養管理区域への立ち入りの制限等、消毒以外の方法で悪性伝染病の侵入を防ぐ事が重要になってきます。



長靴は泥や糞で汚れているため、季節に関わらず確実な消毒が難しいのが現状です。実験では、消毒槽に十数秒浸かっただけでは長靴の菌は半分も除菌されなかったと報告されています。水等を入れた洗浄槽で長靴をブラッシングした後、消毒槽に浸かることで初めて99.99%以上除菌できました。また、長靴の底に納豆菌を付けて歩く実験では、2.5km先でも長靴から納豆菌が検出されました。このように長靴は適切な消毒や履き替えを行わないと汚染を広範囲に広げることになります。長靴を洗

は、2.5km先でも長靴から納豆菌が検出されました。このように長靴は適切な消毒や履き替えを行わないと汚染を広範囲に広げることになります。長靴を洗

浄・消毒し、ある程度病原体を少なくした後に履き替えることで、農場に確実に病原体を入れない・持ち出さない体制を作りましょう。

近隣諸国では現在も口蹄疫や高病原性鳥インフルエンザの発生が確認されています。2010年の思いを風化させず、二度と繰り返さないためにも県一体となって飼養衛生管理基準を遵守し、管理区域の清掃・消毒等防疫体制のさらなる強化に努めましょう。

(宮崎家畜保健衛生所 遠矢宏美)

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜類	病害全般 ※ アブラムシ類	－ やや多	多発してからでは防除効果が劣るので、初期防除を徹底します。特にコスト低減のため多重・多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長される傾向があるので注意が必要です。 きゅうり、ピーマン、いちごでアブラムシ類の発生が多く、防除情報を発表しています。また、一部の地域のワタアブラムシでネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 灰色かび病 褐斑病 つる枯病	並 やや少 並 やや少 並	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。 つる枯病は、発病前からの薬剤散布による予防に重点をおきます。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	前年、前々 年と同程度 やや少	感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般※ (改植時の留意点)	－	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 黒枯病	やや多 やや少 前年より少ない	斑点病の発生がやや多い状況です。多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。 いずれの病害も、罹病葉等は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
	アザミウマ類	やや多	今後暖かくなるにつれて増加する恐れがありますので、発生が多いところでは最少でも7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い、防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病※ うどんこ病	並 やや多 やや多	葉かび病、灰色かび病は多湿条件下で発生しやすいので、施設内が多湿にならないようハウスの換気に努め、曇雨天が続く時は日中でも暖房機の送風を稼働させるなど除湿に努めます。薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用は避けます。
	タバココナジラミ類 トマト黄化葉巻 病 (TYLCV)	やや少 前年より少 ない	ウイルスを媒介するタバココナジラミ類の発生はやや少ない状況ですが、施設内には黄色粘着トラップ等を設置し、媒介虫の早期発見・防除を徹底します。また発病株は根ごと抜き取り、適切に処理します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	並 並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くする等発生初期の防除を徹底します。 炭疽病を確認したときには、直ちに根ごと抜き取り適切に処理します。
	ハダニ類 オンシツコナジラミ	やや多 －	ハダニ類は、寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。 オンシツコナジラミについても、薬剤感受性の低い個体群が確認されていますので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。
<p>1) ※は防除情報を発表しています。</p> <p>2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。</p> <p>3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki です。</p>			